

峯 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第197集

1 9 8 9

福岡市教育委員会

みね
峯 遺 跡

福岡市早良区大字西所在遺跡の調査



遺跡略号 M I N

遺跡調査番号 8743

1989年3月

福岡市教育委員会

序

福岡市西部を流れる室見川上流域には、豊かな自然と文化遺産が残されており、市民憩いの場として広く親しまれています。

本書は昭和62年度福岡市早良区大字西所在の西児童公園建設とともになう発掘調査の成果をまとめたものです。この調査では中世の集落、墓地等が検出され、かつて山岳信仰の中心地となっていた背振山北麓の人々の営みを彷彿とさせるものがあります。

本書が文化財に対するご理解を深めていく上において、また学術研究の分野において、活用していただければ幸いです。発掘調査から資料整理にいたるまで地元関係者をはじめ多くの方々のご協に対し心から謝意を表するものです。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は福岡市都市整備局公園計画課による西児童公園建設に伴い、福岡市教育委員埋蔵文化財課が昭和62（1987）年度に発掘調査を行った峯遺跡の調査報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は、二宮忠司、佐藤一郎、大庭友子、撮影は佐藤があたった。
空中写真は、空中写真「稻富」による。
3. 本書に掲載した遺物の実測は石器を杉山富雄、他は佐藤、撮影は佐藤があたった。
4. 整図は第3～8図を藤村佳公恵、第13・14図を杉山、第2・9～12図を佐藤があたった。
5. 本書に使用する基準方位は、磁北で真北との偏差 $6^{\circ}40'$ である。
6. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管される。
7. 本書の執筆・編集は佐藤が行った。

本文目次

序	
I はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 発掘調査の概要	4
IV 遺構と遺物	
1 検出遺構	5
堀立柱建物	5
土壙墓	6
焼土壤	6
製鉄関連遺構	12
2 出土遺物	12
土壤出土遺物	12
掘立柱建物・Pit出土遺物	14
鉄製品	18
縄文土器	18
石器	20
V 小結	22

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 峯遺跡発掘調査区域図	3
第3図 峯遺跡第1次調査遺構配図	折込み
第4図 掘立柱建物実測図(1)	7
第5図 掘立柱建物実測図(2)	8
第6図 掘立柱建物実測図(3)	9
第7図 土壙墓実測図	10

第8図 焼土壤実測図	11
第9図 土壤出土遺物実測図	13
第10図 掘立柱建物・Pit出土遺物実測図(1)	15
第11図 掘立柱建物・Pit出土遺物実測図(2)	17
第12図 鉄製品・縄文土器実測図	19
第13図 石器実測図(1)	20
第14図 石器実測図(2)	21

図 版 目 次

- 図版 1 1. 調査区遠景（西から）
 2. 調査区南半部分全景
- 図版 2 1. 調査区北半部分全景（北から）
 2. 調査区南東部分
- 図版 3 1. SB26掘立柱建物（北から）
 2. SB19掘立柱建物
- 図版 4 1. SB20掘立柱建物（南から）
 2. SB20掘立柱建物（東から）
- 図版 5 1. 作業風景
 2. SK06土壤墓（北から）
- 図版 6 1. SK10土壤墓（東から）
 2. SK10土壤墓副葬品出土状況
- 図版 7 1. SK10土壤墓土層（南から）
 2. SK11焼土壤（北から）
 3. SK12焼土壤（南から）
 4. SK13焼土壤（南から）
 5. SK14焼土壤（南から）
 6. SK16土壤（南から）
- 図版 8 SK03・04・06・10出土土器・陶磁器
- 図版 9 SK14・16・SB20・19・Pit出土土器、SK03出土石製品
- 図版10 Pit出土陶磁器・石製品、表土出土陶磁器

I はじめに

1 調査にいたる経過

1986(昭和61)年、福岡市都市整備局公園計画課から福岡市教育委員会埋蔵文化財に対して、早良区大字西1251-1他の児童公園建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての問合せがあった。

申請地一帯は1984(昭和59)年に刊行された『福岡市文化財分布地図(西部Ⅲ)』には、峯遺跡群として記載、周知化されている。申請を受けて、埋蔵文化財課では同年9月24日に試掘調査を行った。遺構は東南部で密、北側では疎となるものの、用途面積2,145m²のほぼ全域に亘がっており、その全域を調査の対象とした。協議の結果、翌1987(昭和62)年10月に発掘調査に入る運びとなった。

遺跡調査番号	8743	遺跡略号	M I N	分布地図番号	早良25-A-3
調査地地籍	早良区大字西1251-1他				
開発面積	2,145m ²	調査対象面積	2,145m ²	調査実施面積	1,677m ²
調査期間	1987年10月19日～1988年1月27日				

2 調査の組織

調査委託 福岡市都市整備局公園計画課

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

第1係長 折尾学

事務担当 岸田隆

調査担当 小林義彦・杉山富雄(試掘調査)、二宮忠司・佐藤一郎(発掘調査)

調査作業 整理作業 牛尾豊・柳光雄・広田義美・真名子時夫・有吉千栄子・伊藤みどり・大江美和子・大庭友子・菊地栄子・木村保子・柳スミ子・正崎泰代・多田映子・南里三佳・西田幸代・平川富美子・平川史子・平田ミサ子・藤崎洋子・藤村佳公恵・山口タツエ・山西人美・吉岡勝野

プレハブの設営場所、飲料水の確保等に関して、地元の方々のご協力が得られ、調査が円滑に進み無事終了しました。ここに深く感謝します。

II 遺跡の位置と環境



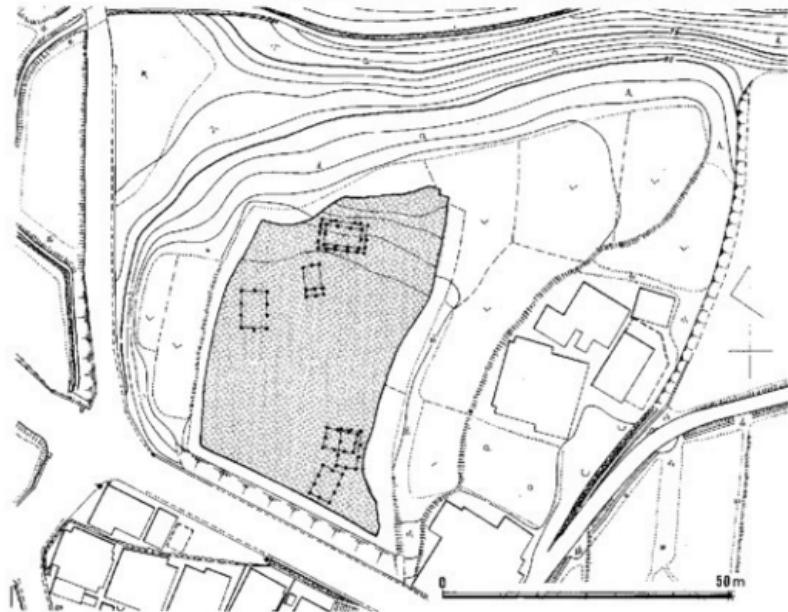
第1図 周辺の遺跡（1/25000）

峯遺跡は福岡市早良区大字西に所在し、室見川の上流域、背振山系から北に派生する丘陵の先端部に位置し、標高82mを測る。

室見川の上流域、旧早良町での本格的な考古学調査は、1984年に分布調査^(註1)を行って以来、まだ端緒についたばかりであるが、ここ数年来、開発に伴って発掘調査が多々行われている。1986年からは脇山地区で置場整備に伴い発掘調査が継続して行われ、縄文から中世に至る遺物、遺構が検出されている。1986年には東入部所在の長峰遺跡で児童公園建設に伴い発掘調査が行われ、13世紀から15世紀にかけての掘立柱建物、土壙、井戸等が検出されている^(註2)。

当地域はまた中世に山岳信仰の中心地の一つとして中世に権勢を誇った背振山の北麓あたり、それに関わる地名・伝承が数多く遺されている。当遺跡名は所在地の字名をとって呼称されたものであるか、「峯」という地名呼称は長享3(1489)年1月22日の背振山東門寺文書に村名として初出する^(註3)。

釣溝 当遺跡の東南数kmの地点に、紀伊国熊野より來た比氏尼が貞觀年間(859~877年)に疏駕したという伝承^(註4)をもつ釣溝が流れている。溝の底には石がしきつめられていたが、近年改修工事が行われ、コンクリートがうたれている。ただ、岩盤を掘削する際のノミの痕が、數カ所みられる。掘削の時期であるが、長徳4(1460)年の產名の堺、田数の注文に記載された原田を中心とした地域は、一部を除き谷と椎原川に挟まれた台地上に位置し、灌漑のために水



第2図 峯遺跡発掘調査区域図 (1/1000)

路を整備しない限り、田地として利用することは不可能である。このことから、長様4年を下らない時期には釣溝が設けられていたとみられている^{註1)}。中世における可耕地の開発のあり方を知る上で、貴重な遺構である。

註1 福岡市教育委員会『福岡市文化財分布地図（西部Ⅲ）』1984

註2 福岡市教育委員会『長峰遺跡』1988

註3 竹内理三編『角川日本地名大辞典－40 福岡県－』

註4 『筑前国続風土記附録』『筑前国続風土記拾遺』に伝承も含め紹介の記事が載せられている。

註5 吉良国光「背振山の所領支配と村落—筑前国早良郡藤山を中心として—」（『九州史学』特集号）1987

III 発掘調査の概要

調査は10月19日にバックフォーによる表土剥ぎから開始した。調査区域内の現状は畑で、遺構面は耕作土を除去すると地表下約30cmの鳥柄ローム層上面で確認されたが、畑作による歓状の擾乱がかなり広範囲に及んでいた。排土置き場を調査区域内で確保しなくてはならないために、打つ手替えて調査を行い、南半部分から着手した。10月30日より、作業員を投入したが、畑作による擾乱の除去に多大な労力を要した。11月12日から本格的に遺構の検出に入り、掘立柱建物、土壤墓、焼土壙を検出した。11月中旬は好天が続いたが、地面が乾燥し、遺構と地山、切り合い関係の判別は困難をきたした。11月19日から、遺構検出作業と併行して遺構実測を開始する。11月末から12月にかけては一転して雨天が続き、遺構の判別が比較的容易になった反面、地山が粘土質であるため作業がどこおがちとなった。12月7日に空中写真撮影、11日には柱穴の完掘、補足調査が終了した。南半部分の埋め戻しの後、北半部分の表土剥ぎにかかった。19日に再び作業員を投入し、擾乱の除去、25日から遺構の検出に入った。年内の作業は28日をもって終了し、年明けは1月5日から再開した。6日には土壤墓を掘り下げていくと、副葬されていた土師器小皿4、龍泉窯系青磁碗1が完形で出土した。19日から遺構の個別写真撮影、実測を開始、26日には北半部全景の写真撮影を行い、27日調査は終了した。



IV 遺構と遺物

1 検出遺構

掘立柱建物 6 棟 土塙基 2 基、焼土塙 5 基、柱穴・ピット状遺構を検出した。いずれも耕作土のすぐ下で検出されたため、層位的な時期区分はできなかった。柱穴・ピット状遺構は、調査区域の東南隅で集中して検出された。その内掘立柱建物として 6 棟抽出したが、まとめきれない柱穴・ピット状遺構が数多くみられた。

掘立柱建物

SB 20 (第4図、図版4)

4面に庇をもつ東西棟の建物で、身舎の規模は梁間2間、桁行3間である。庇と身舎の間隔は4面ともに0.9mを測る。身舎の梁間全長は3.4m、桁行全長は6.6mを測る。身舎の柱穴は径30~40cm、深さ30~50cmを測る。庇の柱穴は径20~30cm、深さ15~50cmを測り、身舎のものより一回り小さい。平面形はいずれも円形を呈する。柱穴底面のレベルは北側へなるにつれて下っており、当初、傾斜した地形に沿って、柱穴掘り方の深さをそろえて掘り込まれたと考えられる。方位はN-6°-Eにとる。

SB 23 (第5図、図版2)

梁間2間、桁行3間の南北棟の建物である。梁間の全長3.75m、桁行の全長6.85mを測る。柱穴は円形で、径25~35cm、深さ45~60cmを測る。南側妻柱に偏平な根石をもつ、方位はN-7°30'-Eにとる。

SB 24 (第5図、図版2)

梁間2間、桁行3間の南北棟の建物である。梁間の全長4.0m、桁行の全長5.9mを測る。柱穴は円形で、径25~40cm、深さ10~60cmを測る。方位はN-26°-Eにとる。

SB 25 (第5図、図版2)

梁間2間、桁行3間の東西棟の建物である。梁間の全長4.1m、桁行の全長6.3mを測る。柱穴は円形で、径30~40cm、深さ15~55cmを測る。東側妻柱が溝に切られている。方位はN-20°-Wにとる。

SB 26 (第5図、図版7)

2間分の柱列を南北方向に3列検出したが、北側の柱列とその南側の柱列の間隔が4.0mと大きく開き、その間の柱穴の存在が考えられた。周辺域をも含めて柱穴の精査に努めたが、新たに検出することはできなかった。東西方向の全長は3.2m、南側の柱列間の間隔は1.1mを測る。柱穴は円形で、径50~70cm、深さ40~60cmを測る。方位はN6°Wにとる。

SB 19 (第6図、図版3)

梁間2間、桁行3間の南北棟の建物である。梁間の全長4.6m、桁行の全長は6.5mを測る。

柱穴は円形で、径60~70cm、深さ40~70cmを測り、南東隅の柱穴は擾乱を受けている。方位はほぼ真北にとる。

土壤墓

SK 06 (第7図、図版5)

C-5区で検出した。北側は擾乱を受けているが、平面形は東西に長い長方形とみられ、全長2.3m、残存幅80cmを測る。残存する深さは10cmとかなりの削平を受けている。土師器小皿5が底面より約8cm浮いた状態で出土した。擾乱内からは、土師器小皿細片(SK06出土のものと同じタイプ)、龍泉窯系青磁碗1が破碎された状態で出土した。本来はSK06に伴い、土師器小皿とともに副葬されたのであろう。方位はN-26°-Eにとる。

SK 10 (第7図、図版6)

D-3区で検出した。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、全長1.6m、幅75~80cm、深さ20cmを測る。墓壙の北西隅に、龍泉窯系青磁碗1、土師器小皿4が底面に接して副葬されていた。方位はN-8°30'-Wにとる。

焼土壙

壁面が上端から10cm前後の幅で固く焼きしまった土壙で、埋土には炭化物が充満している層がみられる。製鉄炉、火葬墓の可能性が考えられたが、鉄滓、鞴羽口等の製鉄関連遺物や骨片は遺構の埋土中およびその周辺にも見当らず、性格は判然としない。時期を窺う遺物は、SK14から土師器杯片が出土しただけである。SK01以外は北半部で検出され、長軸を南北方向にとり、南側の短辺がやや長い。

SK 01 (第8図、図版7)

C-6区で検出した。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、全長1.6m、幅0.95m、深さは中央部で25cmを測り、西側の短辺がやや長い。壁は斜めに立ち上り、壁面の北側の一部が上端から10cm前後の幅で固く焼きしまり、橙色を呈する。方位はN-6°30'-Eにとる。

SK 11 (第8図、図版7)

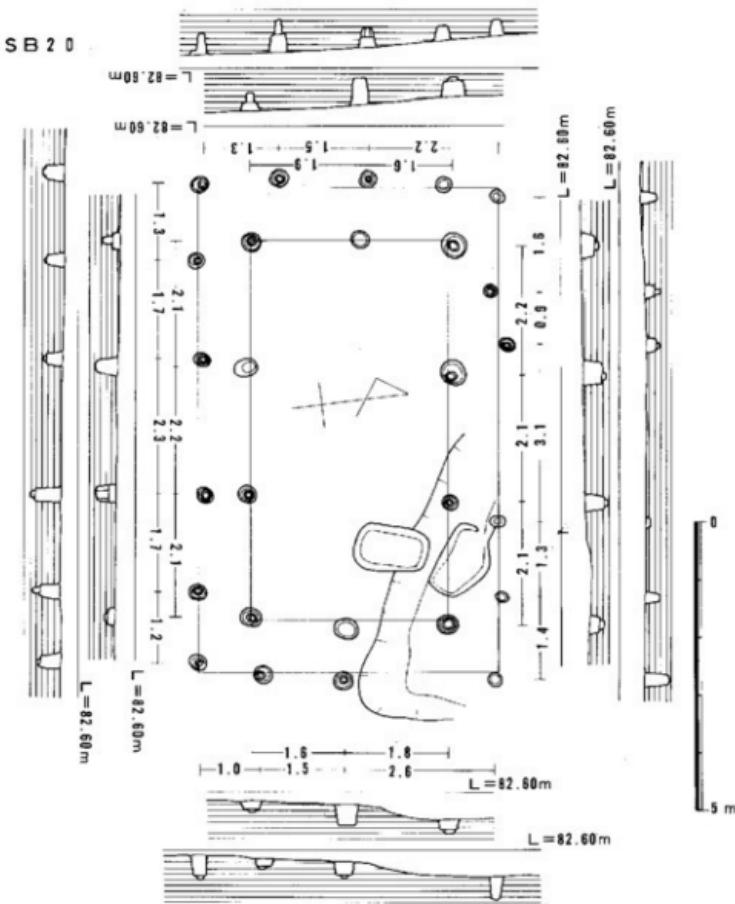
D-4区で検出した。平面形は南北に長い不整円形を呈し、全長1.2m、幅0.95m、深さは中央部で20cmを測る。壁は斜めに立ち上り、壁面の南半部が上端から10cm前後の幅で固く焼きしまり、橙色を呈する。

SK 12 (第8図、図版7)

D-3区で検出した。平面形は南北に長い長方形を呈し、長さ1.9m、幅1.15m、深さは中央部で30cmを測り、南側の短辺がやや長い。壁はほぼ垂直に立上り、南北の壁面と東側の壁面の一部が上端から10cm前後の幅で固く焼きしまり、橙色を呈する。方位はN-24°30'-Wにとる。

SK 13 (第8図、図版7)

B-2区で検出した。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、長さ1.6m、幅0.9m、深さは中

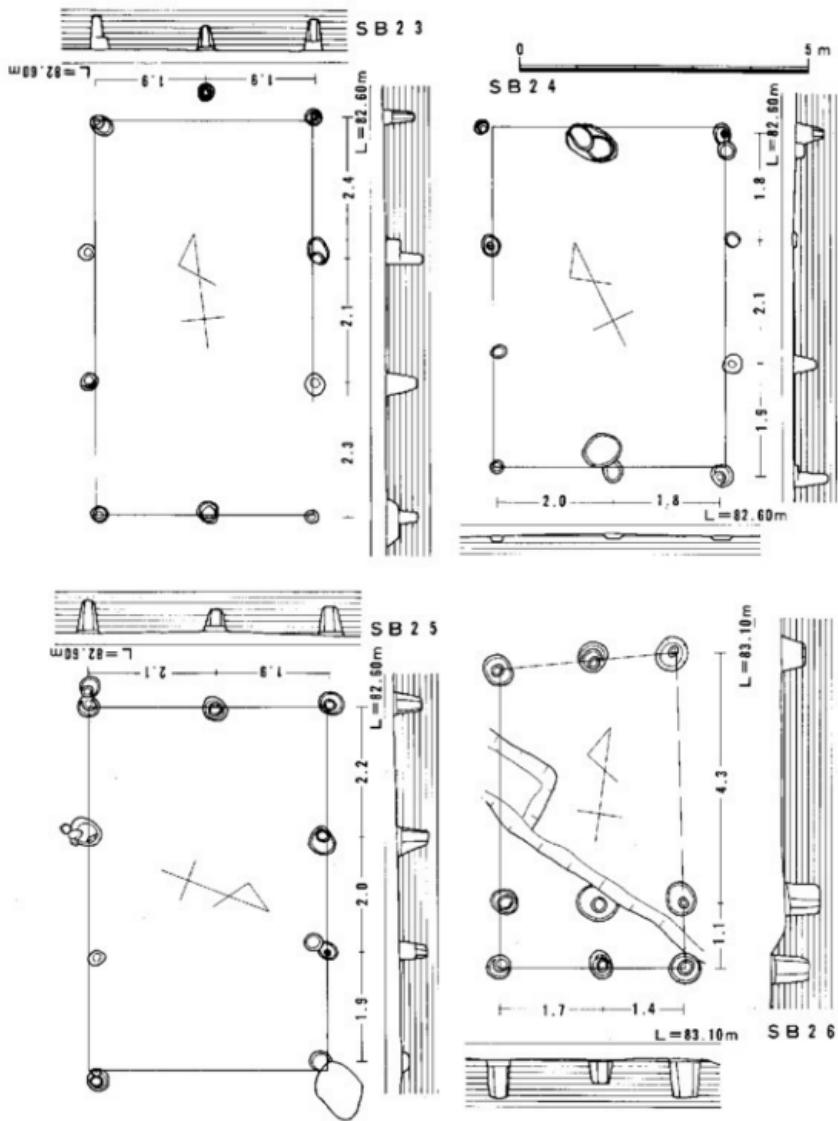


第4図 無立柱建物実測図(1) (1/100)

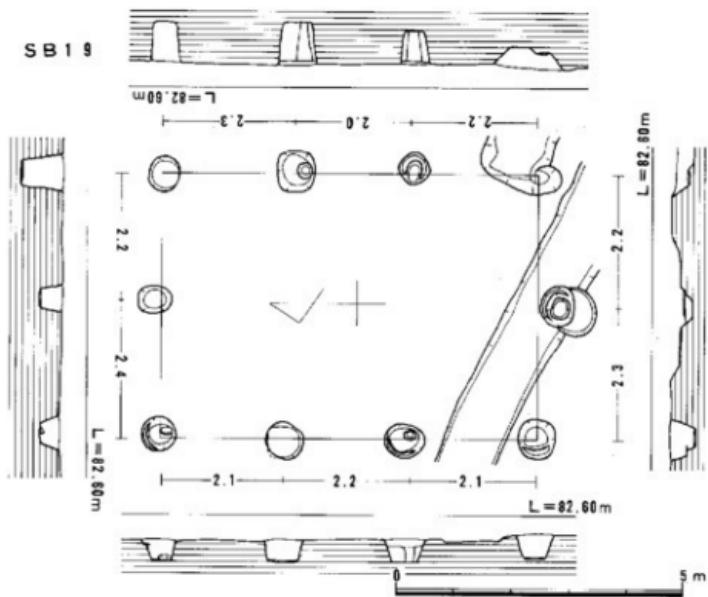
央部で20cmを測り、南側の短辺がやや長い。壁はほぼ垂直に立ち上り、駆面は削平を受けている南側を除いて上端から10cmの幅で焼きしまり、橙色を呈する。方位はN-10°-Eにとる。

SK 14 (第8図、図版7)

C-2区で検出した。平面形は南北に長い小判形を呈し、長さ2.1m、幅1.2m、深さは中央部で50cmを測り、南側が幅広になる。壁は斜めに立ち上り、壁面は上端から10cm前後の幅で固く



第5図 据立柱建物実測図(2) (1 / 100)



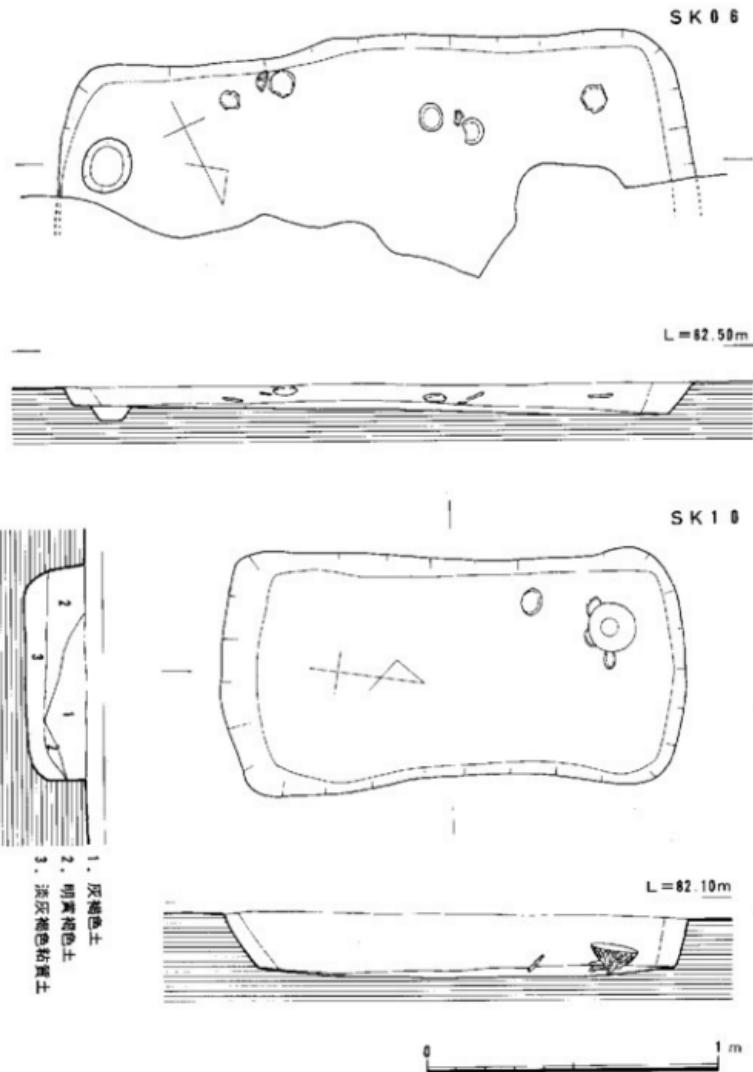
第8図 挖立柱建物実測図(3) (1/100)

焼きしまり、橙色を呈する。所々に焼きしまった壁面が底面上に崩落していた。底面中央部よりやや北側がピット状に浅く掘り込まれ、南半部は約10cm深くなり段をなす。方位はN-18°30'-Eにとる。

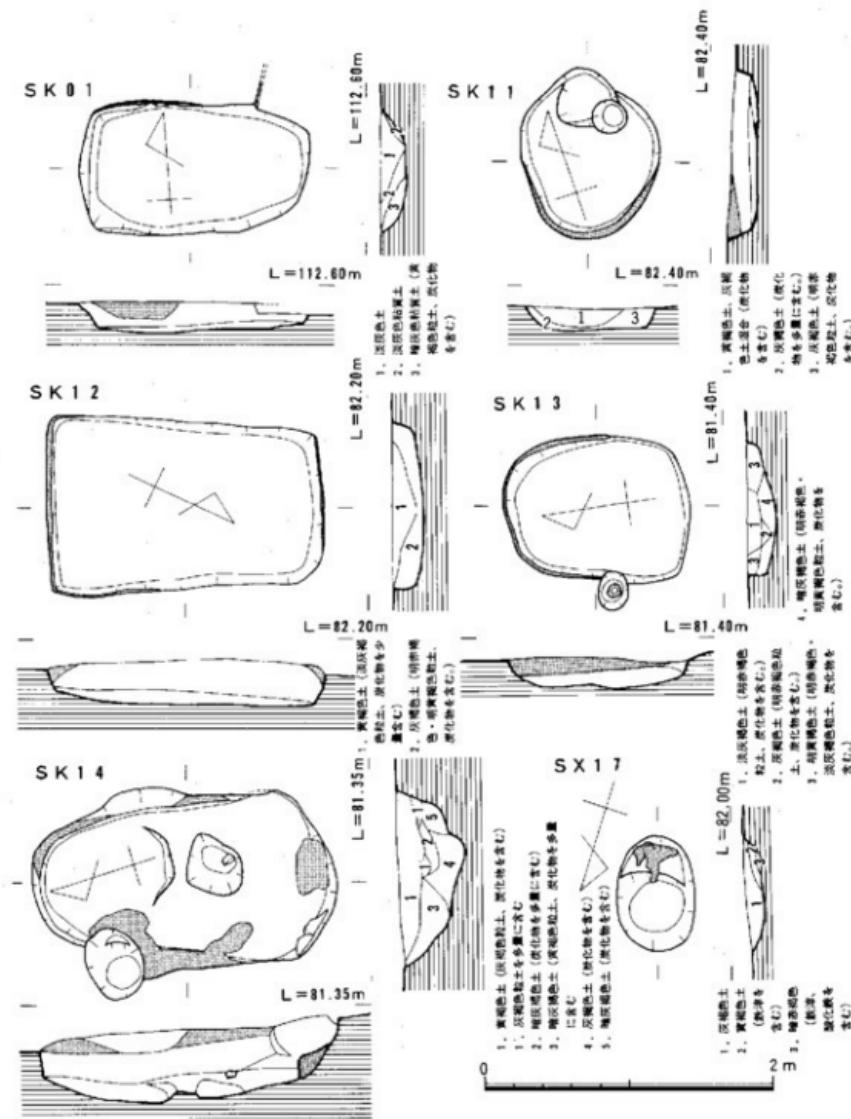
製鉄関連構

SX 17 (第8図)

C-2区で検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈し、長さ80cm、幅55cm、深さ10cmを測る。北側に鉄滓を含み固く焼きしまった暗赤褐色土がみられ、その上面に鉄滓を含む黄褐色土、灰褐色土が堆積する。方位はN-16°30'-Wにとる。



第7図 土壌基実測図 (1/20)



第6図 焼土発生測定図 (1/40)

2 出土遺物

SK 03出土遺物（第9図、図版8・9）

土師器小皿・杯細片、須恵器、白磁、青磁、砥石が出土した。

須恵器

片口鉢(1) 上方に拡張し、「く」字状をなす口縁部片で、内外面とも横ナデを施す。器周残1/6からの復元口径20.6cmを測る。胎土には砂粒を含み、焼成は不良で脆弱、色調は口縁端部が淡黄灰色、その他の部位は灰色を呈する。瓦質土器とした方が適切かもしれない。

白磁

皿(2) 口縁端部を口禿にする口縁部片で胎土は白色で黒い微粒子を含み、釉は空色かかった灰白色を呈する。

龍泉窯系青磁

碗(3) 体部外面に簞蓮弁を削り出す。胎土は灰白色で黒色微粒子を含み、釉は緑色を呈し、高台疊付とその内側は露胎である。

石製品

砥石(4) 4面を砥ぎ面として使用している。

SK 04出土遺物（第9図、図版8）

土師器

杯(5) 口縁部は欠失し、底径10.0cmを測る。底部は糸切り離しで、磨滅により体部および内底の調整、圧痕の有無は不明。

須恵器

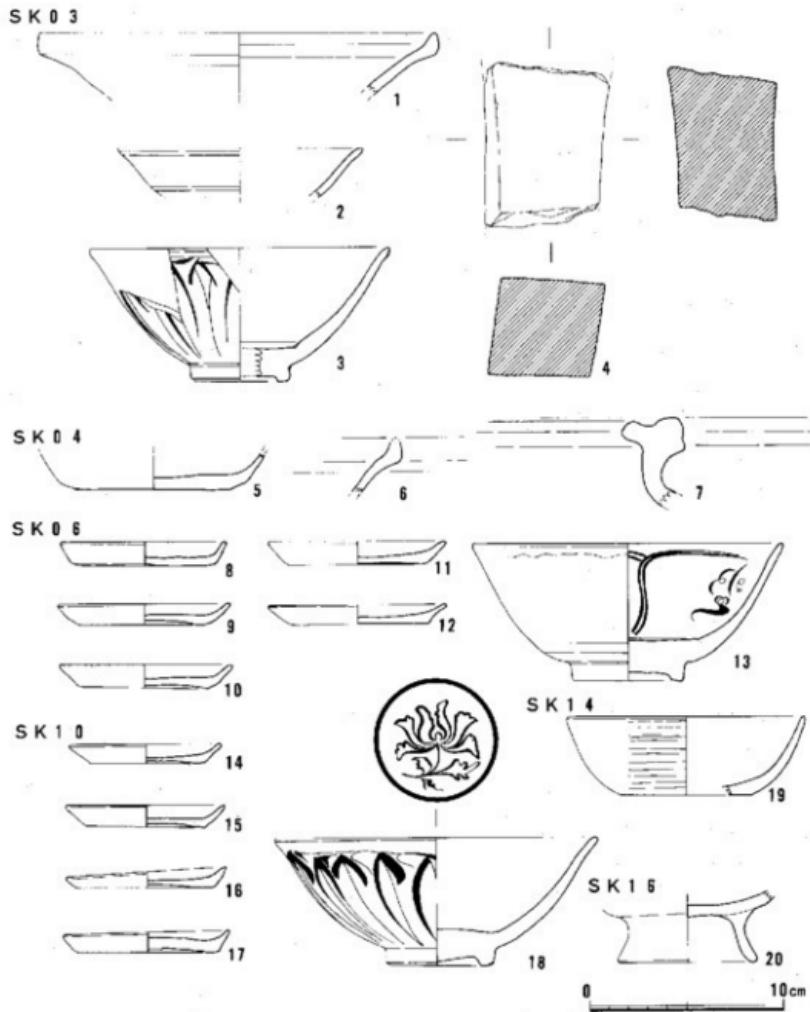
片口鉢(6) 上方に拡張し、「く」字状をなす口縁部で、上端部は欠失し、内外面とも横ナデを施す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈し、口縁端部には灰黒色の自然釉がみられる。

陶器

甕(7) Y字口縁の小片で、傾きはあまり確かなものとはいえない。残存する範囲では内外面とも横ナデ、胎土は暗赤色を呈し、白色の砂粒を多量に含む。

SK 06出土遺物（第9図、図版8）

先述したように、墓壙の北半が擾乱をうけており、擾乱内からはSK06出土のものと同じタイプの土師器小皿細片とともに龍泉窯系青磁碗が破碎した状態で出土した。本来は土師器小皿とともにSK06に副葬されたのであろう。



第3図 土器出土遺物実測図 (1/3)

土器

小皿 (8~12) 底部は糸切りで、口径8.4~9.2cm、器高1.0~1.2cm、底径6.2~7.4cmを測る。体部は横ナデ、内底部はナデ、外底部には板状圧痕がみられる。

龍泉窯系青磁

碗13 体部内面に綾曲線を入れ、間に雲文を配す。内底見込みは無文である。胎土は緻密で灰色、釉は緑色を呈し、透明感はない。高台疊付とその内側は露胎である。

SK 10出土遺物（第9図、図版8）

土師器小皿4、龍泉窯系青磁碗が出土した。

土師器

小皿（14～17）底部は糸切り離しで、口径7.8～8.6cm、器高0.8～1.1cm、底径5.8～7.5cmを測る。器面の荒れが著しく、体部および内底部の調整、外底部の圧痕の有無は不明。

龍泉窯系青磁

碗18体部外面に鍋蓮弁を削り出し、内底見込みに花文をスタンプする。胎土は灰色で黒い微粒子を含み、釉は淡緑灰色を呈する。高台疊付とその内側は露胎である。

SK 14出土遺物（第9図、図版9）

土師器

杯19 器周残1/3からの復元口径12.2cm、器高4.1cm、底径6.8cmを測り、体部は丸味をもって開く。底部は水平にヘラ切りされ、体部内面は横ナデ、外面上半はヘラ磨キ、下半はヘラ削りの後ヘラ磨キされる。

SK 16出土遺物（第9図、図版9）

土師器20 底部のみの資料で、器種は不明。高く外側に開く高台を貼付する。高台径7.2cmを測る。

掘立柱建物・Pit出土遺物（第10～12図、図版9・10）

須恵器 1～4はSB19柱穴掘り方出土

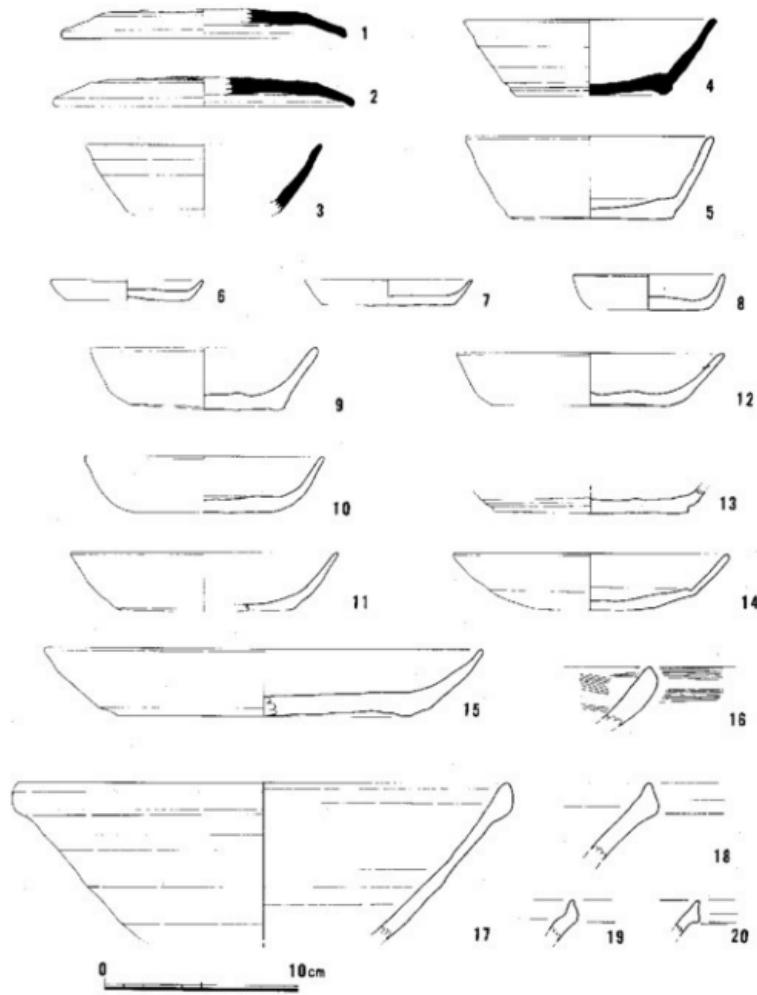
杯蓋（1・2）天井部と体部の縁は明瞭な稜線をなす。口縁端部は折り曲げられ、退化し丸味をもった受け部をなし、内面の稜線は不明瞭である。天井部は回転ヘラ削り、その他の部位は横ナデを施す。いずれも胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、灰色、1の口縁端部は灰黒色を呈する。

杯（3・4）体部は直線的に大きく開く。3は底部欠失。4は高台が底部端に貼付される。底部は回転ヘラ切り、体部および高台は横ナデ、外底には板状圧痕がつく。3は胎七に砂粒を少量含み、焼成は良好で、灰色を呈する。4は細かい砂粒を極少量含み、焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

土師器

杯(5) 底部はヘラ切り、体部および内底は横ナデを施す。胎土には砂粒を含み、焼成は不良で、淡黄褐色を呈する。Pit130(B-3区)出土。

小皿（6～8）いずれも底部は糸切り離しによる。6は口径7.8cm、器高1.1cm、底径6.4cmを



第10図 捜査柱遺物・Pit出土遺物実測図(1) (1 / 3)

測り、Pit11 (D-7区) 出土。7は口径8.6cm、器高1.4cm、底径7.0cmを測り、Pit13 (C-7区) 出土。6・7は器面の荒れが著しく、体部および内底部の調整、外底部の圧痕の有無は不明。8は口径7.8cm、器高1.8cm、底径6.0cmを測り、深めて底径が口径に対して小さい。底部は糸切りで、体部外面から内底部まで横ナデで、外底部に圧痕はみられない。Pit1 (D-7区) 出土。

杯（9～13）いずれも底部は糸切り離しによる。9は口径11.8cm、器高3.2cm、底径7.9cmを測る。体部は横ナデ、外底部に板状圧痕がみられる。Pit67（C-6区）出土。10は口径12.4cm、器高2.9cm、底径7.2cmを測る。器面の荒れが著しく、体部および内底部の調整、外底部の圧痕の有無は不明。Pit02（D-7区）出土。11は口径13.8cm、器高3.1cm、底径9.2cmを測り、Pit141（C-3区）出土。12は口径13.8cm、器高2.8cm、底径9.1cmを測り、Pit129（C-7区）出土。11・12の体部は横ナデ、内底部の調整、外底部の圧痕の有無は器面の荒れが著しく不明。13は底部のみの破片資料で、底径8.0cmを測る。内底部はナデ、外底部に板状圧痕がみられる。SB20柱穴掘り方出土。

丸底杯④ 口径14.2cm、器高2.9cmを測る浅めのもので、器面の荒れが著しく、調整不明。Pit145（A-5区）出土。

大皿⑤ 底部は糸切り離しで、器周残1/4からの復元、口径22.5cm、器高3.4cm、底径15.0cmを測る。体部は横ナデ、器面の荒れが著しく、内底部の調整、外底部の圧痕の有無は不明。SB20柱穴掘り方出土で、土師器杯13と共に。

瓦質土器

片口鉢⑥ わずかに肥厚する口縁部で、内外面とも刷毛目を施す。胎土には細かい砂粒を多量に含み、焼成は良好で、口縁端部から外面にかけて灰黒色、内面は灰白色を呈する。Pit11（D-7区）出土。

須恵器

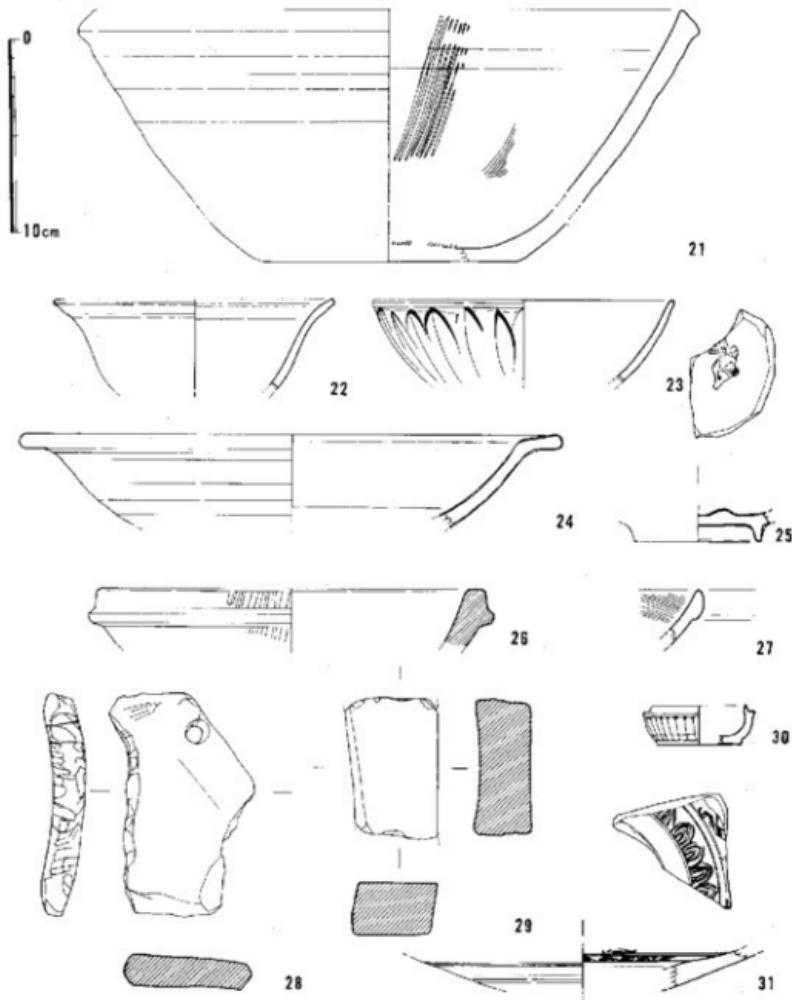
片口鉢（17～20）17は口縁部を玉縁状にし体部は直線的に外上方に延び、底部欠失。体部内面は不定方向のナデ、その他の部位は横ナデを施す。器周残1/8からの復元口径25.6cmを測る。Pit19（C-6区）出土。18～20は口縁部で、内外面とも横ナデを施す。18は端部を上下に拡張し肥厚させる。Pit110（D-6区）出土。19は内上方に拡張し、「く」字状をなす。Pit132（D-6区）出土。20は下方に拡張している。Pit15（D-6区）出土。いずれも胎土には砂粒を含み、色調は口縁端部が灰黒色、その他の部位は灰色を呈し、17は赤味を帯びている。

陶器

溜鉢⑦ 口縁端部を上下に拡張し、外下方に傾斜する。体部は直線的に外上方に延び、内外面とも横ナデを施す。8本単位の卸し目を下から上へ施す。内面の体部下半以下は使用により、横ナデの痕跡、卸し目が磨耗している。器周残1/5からの復元口径32.0cmを測る。胎土には細かい砂粒、錐状の黄白色粘土を含み、赤褐色を呈する。備前焼である。Pit01（D-7区）出土で、土師器小皿8と共に。

白磁

椀⑨ 口縁端部を口禿にし、体部は丸味をもち、口縁部は外反する。胎土は灰白色で黒い微粒子を含み、釉は灰白色を呈する。Pit27（D-6区）出土。



第11回 挖立柱建物・Pit出土遺物実測図(2) (1 / 3)

龍泉窯系青磁

碗23 体部外面に鍋蓮弁を削り出す。胎土は灰白色で黒い微粒子を含み、釉は青色の強い灰緑色を呈する。Pit68 (C-6区) 出土。

杯29 内底見込みに魚文を貼付し、細く畳付が尖った高台をもつ底部片である。胎土は灰色で

黒い微粒子を含み、釉は青色の強い淡緑色を呈し、全面施釉の後、疊付の釉をカキ取っている。SB23柱穴掘り方出土。

盤24 口縁部は外反し、内面に稜線をなす。内底部に段をもつが、それより下部は欠失している。胎土は灰白色で黒い微粒子を含み、釉は淡緑色を呈する。Pit132 (C-6区) 出土。

石製品

石錐26 滑石製で、口縁端部から1.0cm下方に断面台形の鈎を割り出している。外面にはノミ状工具による削痕がみられ、口縁端部から内面にかけてと鈎の部分は丁寧に研磨を施し、平滑に仕上げている。外面には煤が付着している。器周残1/4からの復元口径20.0cmを測る。Pit02出土で、土師器杯10と共に。

方形石製品28 滑石製で、右側面が欠損しているが、本来は長方形の札状のもので、穿孔部は短辺中央部から2cm内側に位置したと考えられる。長軸の断面形には湾曲がみられ、石鍋を転用・再加工したものとみられる。側面にはノミ状工具による削痕がみられ、その他の部位は研磨を施す。長径11.5cm、残存する短径6.6cm、厚さ1.6cmを測る。Pit5 (D-7区) 出土。

砥石29 4面を砥ぎ面として使用している。砂岩製。Pit31出土。

表土出土遺物 (第11図、図版10)

瓦質土器

片口鉢27 玉縁状の口縁部片で、端部は横ナデ、内面には刷毛目を施す。外面下部は磨滅により調整不明。胎土には砂粒を含み、淡黄灰色を呈し、焼された器表は灰黒色を呈する。

青白磁

合子30 体部に蓮華座を型押しする身の部分である。胎土は白色で黒い微粒子を含む。釉は空色を帯びた白色を呈し、蓋受け部、体部外面下半から外底部は露胎である。

高麗青磁

椀31 体部下半の破片資料。内底部見込みに段がつくが、それより内側は欠失している。段の外側に圓線、蓮弁、さらに2重の圓線を白象嵌し、その外周には草花文とみられる文様を白、黒象嵌している。体部外面には2重の圓線を白象嵌している。胎土は灰色で黒い微粒子を含み、釉は灰緑色を呈する。

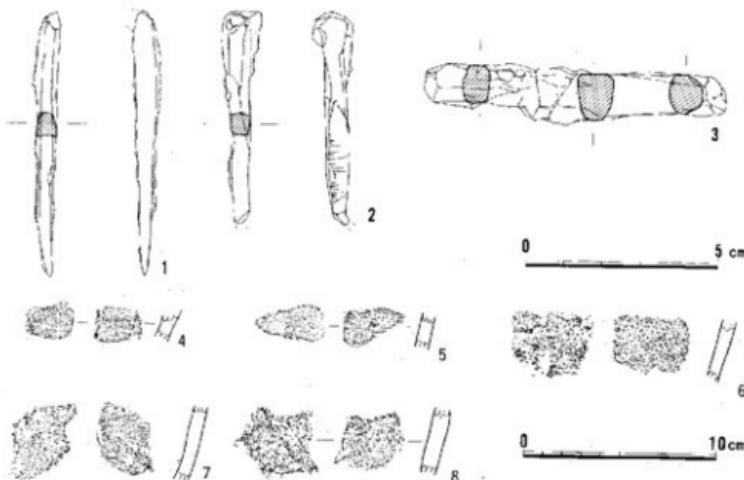
鉄製品 (第12図)

鉄釘 (1・2) 断面方形の角釘である。頭部は折り曲げられ、先端部に向かって細くなる。1は表採で、頭部を欠損する。2はPit34 (D-6区) 出土で、両端を欠損し、木質が残る。

刀子(3) 両端が欠失し、銹化が進行していたために、金属部分の外形は判然とし難いが、刃部と茎の境には闇がみられる。断面形は刃部が倒卵形、茎部は方形を呈する。Pit11 (D-7区) 出土。

插図番号	口 径(cm)	器 高(cm)	底径(cm) (高台径)	插図番号	口 径(cm)	器 高(cm)	底径(cm) (高台径)	插図番号	口 径(cm)	器 高(cm)	底径(cm) (高台径)	
S K 03				16	8.3	0.8	7.2	小				
須 惠 器 片 口 鉢			17				7.5	6	(7.8)	1.1	6.4	
1 (20.6)				S K 14				7	(8.6)	1.4	(7.0)	
S K 04				杯				8	(7.8)	1.8	(6.0)	
杯			19 (12.2) 4.1 (6.8)				杯					
5	8.0			S K 16				9	11.8	3.2	7.9	
S K 06				器 種 不 明				10	(12.4)	2.9	7.2	
小 隅			2.0					11	(13.8)	3.1	9.2	
8 (8.4)	1.3	(7.4)	柱 穴					12	13.8	2.8	9.1	
9 8.8	1.1	6.2	須 惠 器 蓋				丸 底 杯					
10	1.2	6.5	1 (14.6)					13				
11 9.1	1.2	7.0	2 (15.5)					14	14.2	2.9		
12 9.2	1.0	7.0	須 惠 器 (杯)				大 皿					
S K 10				3 (12.2)				15	(22.5)	3.4	(15.0)	
小 皿			4 (13.0)	須 惠 器 片 口 鉢								
14 7.8	1.0	5.8	杯				17	(25.6)				
15 8.2	1.1	6.0	5 (12.8)	4.3	8.6							

出土土器計測表 (括弧内の数値は復元値)



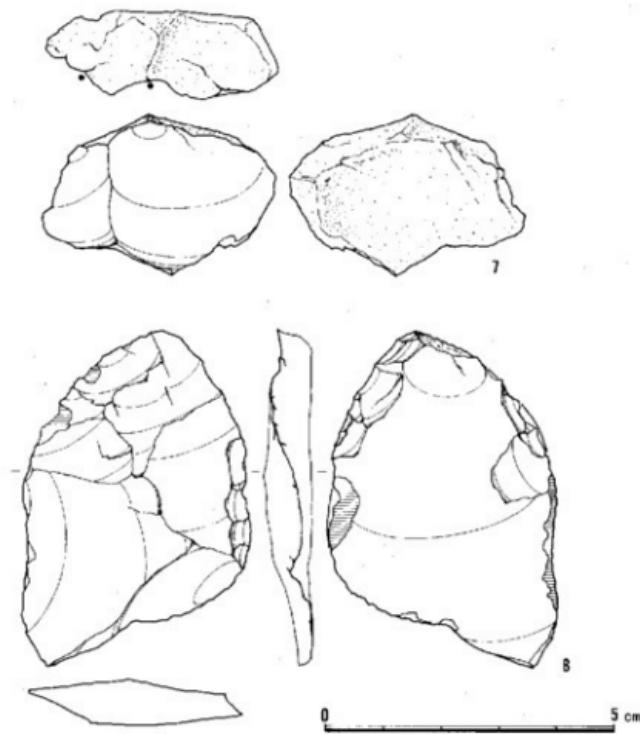
第12図 鉄製品・織文土器実測図 (2 / 3 + 1 / 3)



第13図 石器実測図(1) (1 / 1)

縄文土器 (第12図)

いずれも焼成は脆弱で、器表のアレが著しく、施文・調整の痕跡をとどめていない。胎土には石英・長石の砂粒を含み、3はそれに加え金雲母を含む。色調は4 (Pit106, B-6区出土)



第14図 石器実測図2) (1 / 1)

が淡灰褐色、5 (Pit32、C-6区出土)・8 (Pit51、A-5区出土) が赤褐色、6 (SK14出土) が黄灰色、7 (Pit49、D-5区出土) が淡褐色を呈する。

石器 (第13・14図)

1・2は基部に深い逆U字形の抉り込みをもつ鉄形鎌である。いずれも黒曜石製で、1は試掘調査の際に表探、2は調査区北側表上からの出土。3～5・8は剥片石器で、4 (SK16出土)・5 (SK01出土) が黒曜石製、3 (Pit32、C-6区出土)・8 (Pit102、B-6区出土) が安山岩製である。6・7は石核で、いずれも黒曜石製で、表上から出土。

V 小 結

先述の通り、遺構の層位的な時期区分はできなかったが、遺構の出土遺物から3期に区分した。

I期 8世紀中頃～後半

SB19は柱穴掘り方出土遺物が示す特徴から当期に該当する。SB26は柱穴掘り方から遺物の出土はなかったが、埋土がSB19同類であることから同時期に置く。焼土壙SK14から当期の特徴を示す土師器杯片が出土しているが、他の焼土壙からは時期決定可能な遺物は出土していない。

II期 12世紀後半～13世紀前半

土壙墓SK06は、副葬されていた土師器小皿の法量から当期に該当する。龍泉窯系青磁碗I-4が本来副葬されていたとして、当期に置くことは十分可能であろう。掘立柱建物で当期に該当するものはみられなかったが、Pit145出土の土師器丸底杯など当期に属する遺物であり、調査区域周辺に建物の分布が考えられる。

III期 14世紀前半

調査区南東部で検出された掘立柱建物群は、S B23柱穴掘り方から龍泉窯系青磁杯底部片が出土したほかは柱穴掘り方出土遺物が小片で時期の決め手を欠くが、その周辺の建物としてまとめてきれない柱穴・ピットからは比較的残りのよい遺物が出土している。それらの中には床束、地鎮の性格をもった遺構として建物に伴うとみられるものがあり、埋土は建物と同類であることから、消極的な根拠ではあるが、建物の時期をそれらの遺物から当期に定めた。土壙墓SK10は、副葬されていた土師器小皿の法量から当期においた。鏹蓮弁文を外面に割り出す龍泉窯系青磁碗が共伴していたが、市内では宮崎馬出SK30^{註1}、今宿五郎江1次中世墓^{註2}に同じ共伴例がみられる。土師器の法量の平均値は宮崎馬出SK30(小皿2点が伴う)が、口径9.2cm・器高1.4cm・底径7.3cm、今宿五郎江1次中世墓(小皿4点が伴い、内圓化3点)は口径8.9cm・器高1.3cm・底径7.1cmを測るのに対し、SK10は口径8.2cm・器高1.0cm・底径6.6cmと小さくなる。青磁碗をみると、SK10出土のものは先の2例より器高が低く蓮弁の幅が狭い。後出するタイプであろうか。

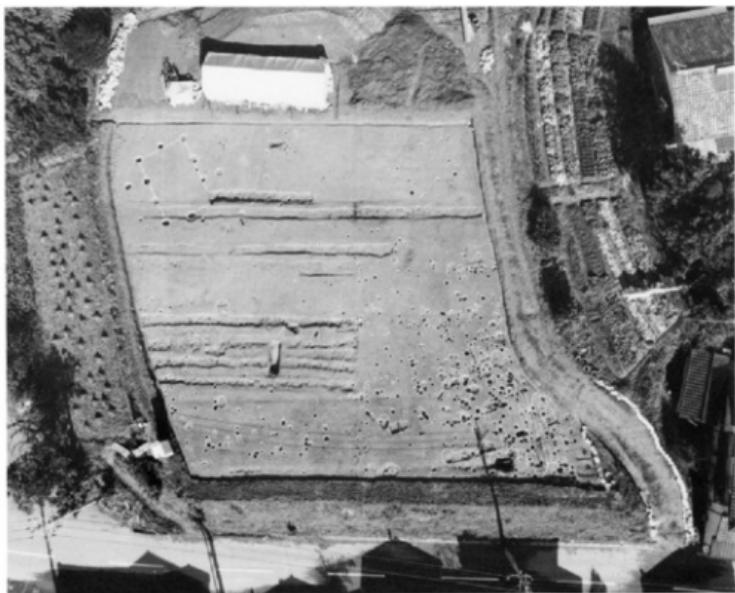
註1 福岡市教育委員会「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書 博多」1988

註2 福岡市教育委員会「今宿五郎江遺跡 I」1986

図 版

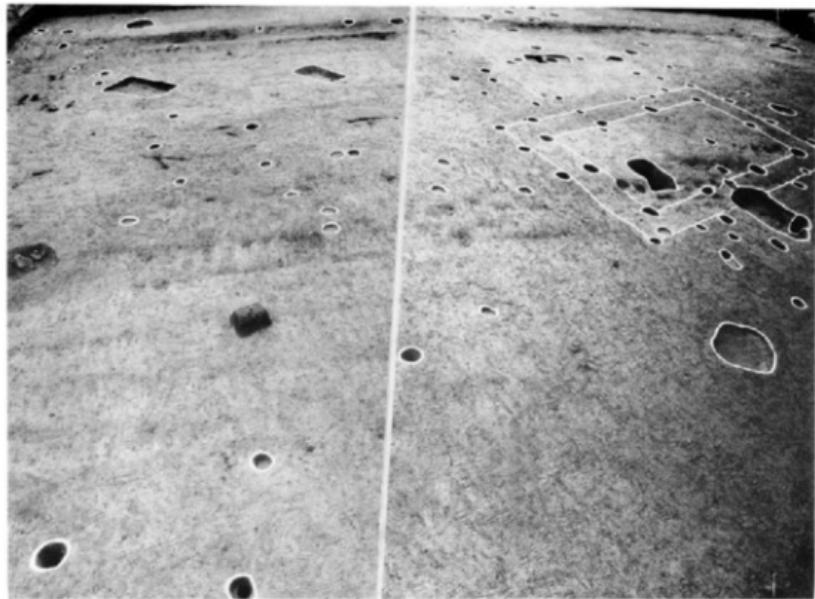


1. 調査区遠景（西から）



2. 調査区南半部分全景

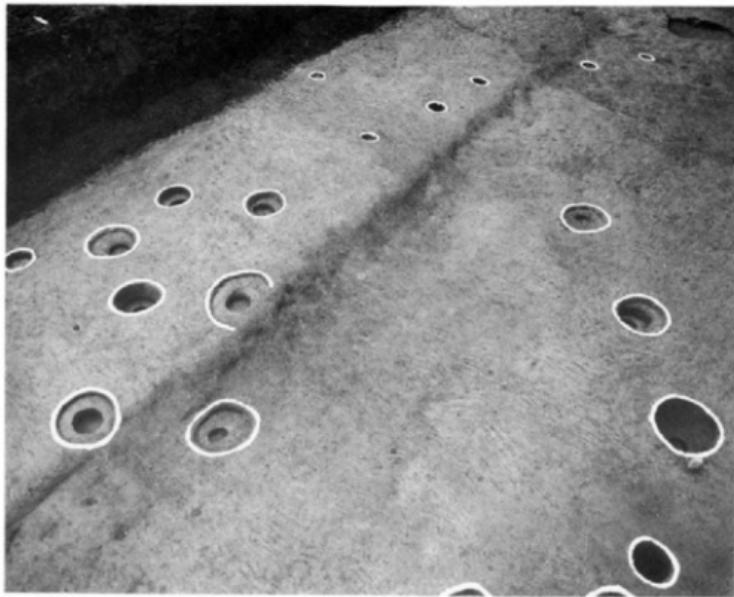
図版 2



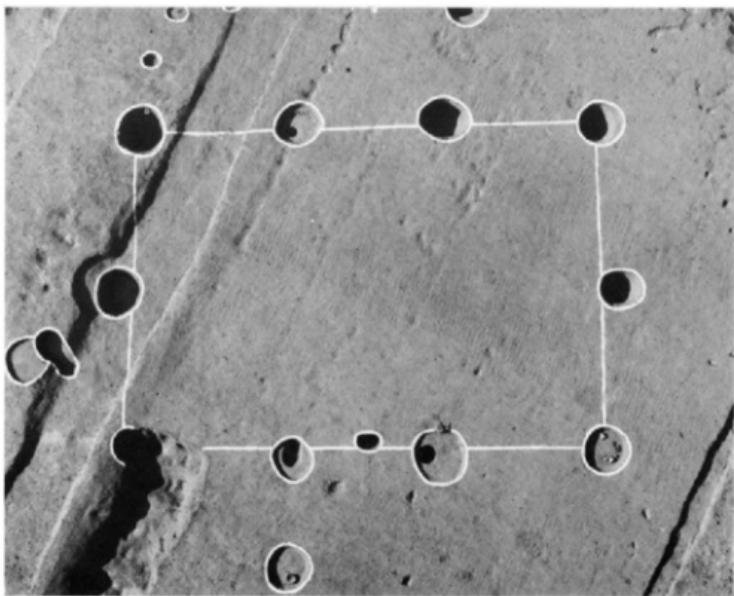
1. 調査区北半部分全景（北から）



2. 調査区南東部分



1. SB26掘立柱建物（北から）

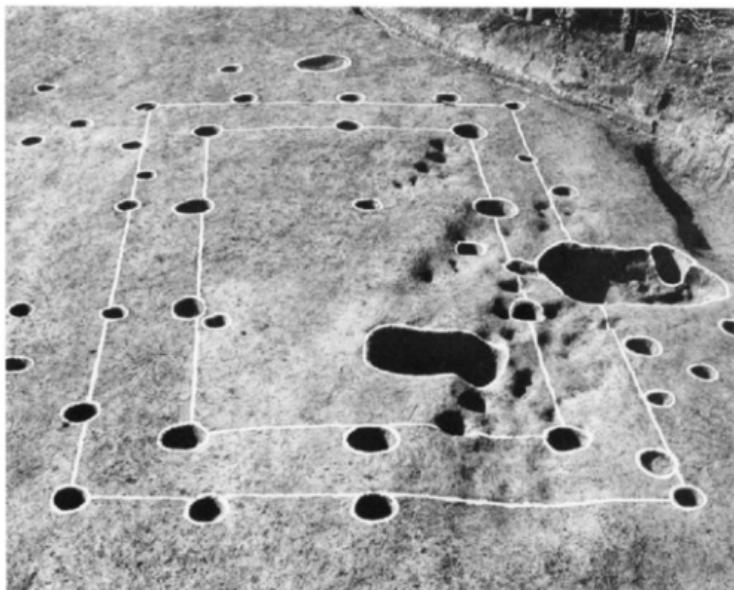


2. SB19掘立柱建物

図版4



1. SB20掘立柱建物(南から)



2. SB20掘立柱建物(東から)

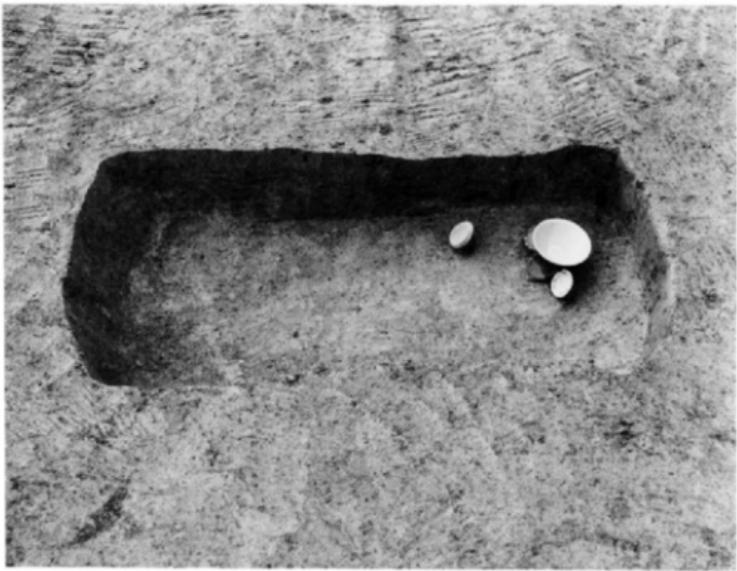


1. 作業風景



2. SK06土壤墓（北から）

図版 6



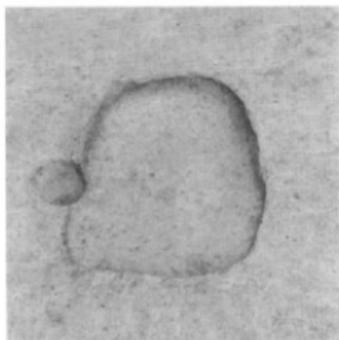
1. SK10土壤墓（東から）



2. SK10土壤副葬品出土状況



1. SK10土壤基土層（南から）



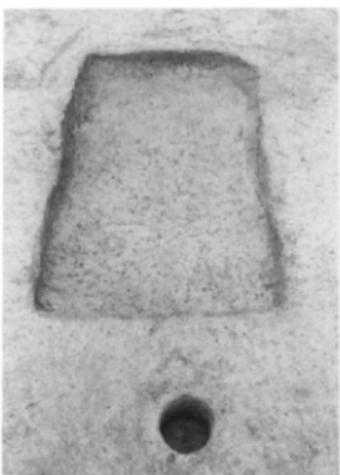
4. SK13焼土壤（南から）



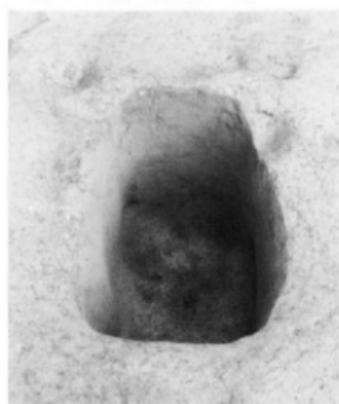
2. SK11焼土壤（北から）



5. SK14焼土壤（南から）

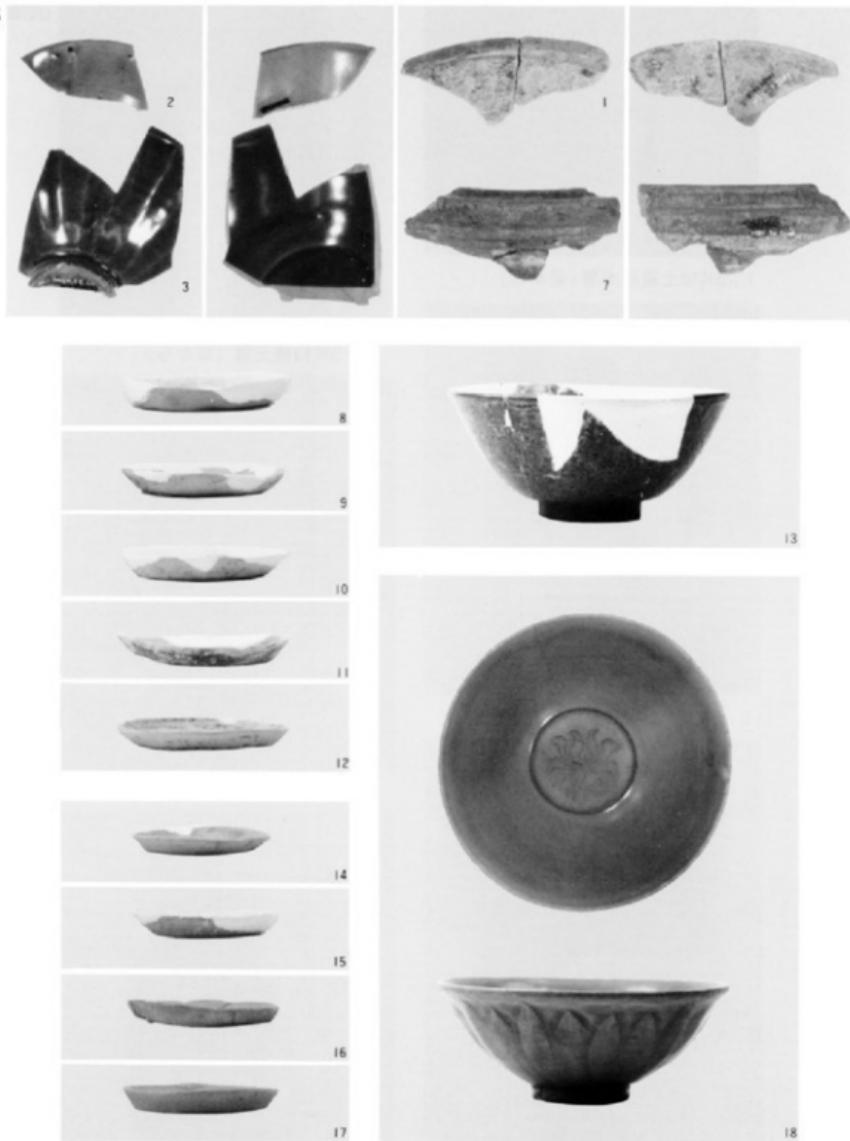


3. SK12焼土壤（南から）



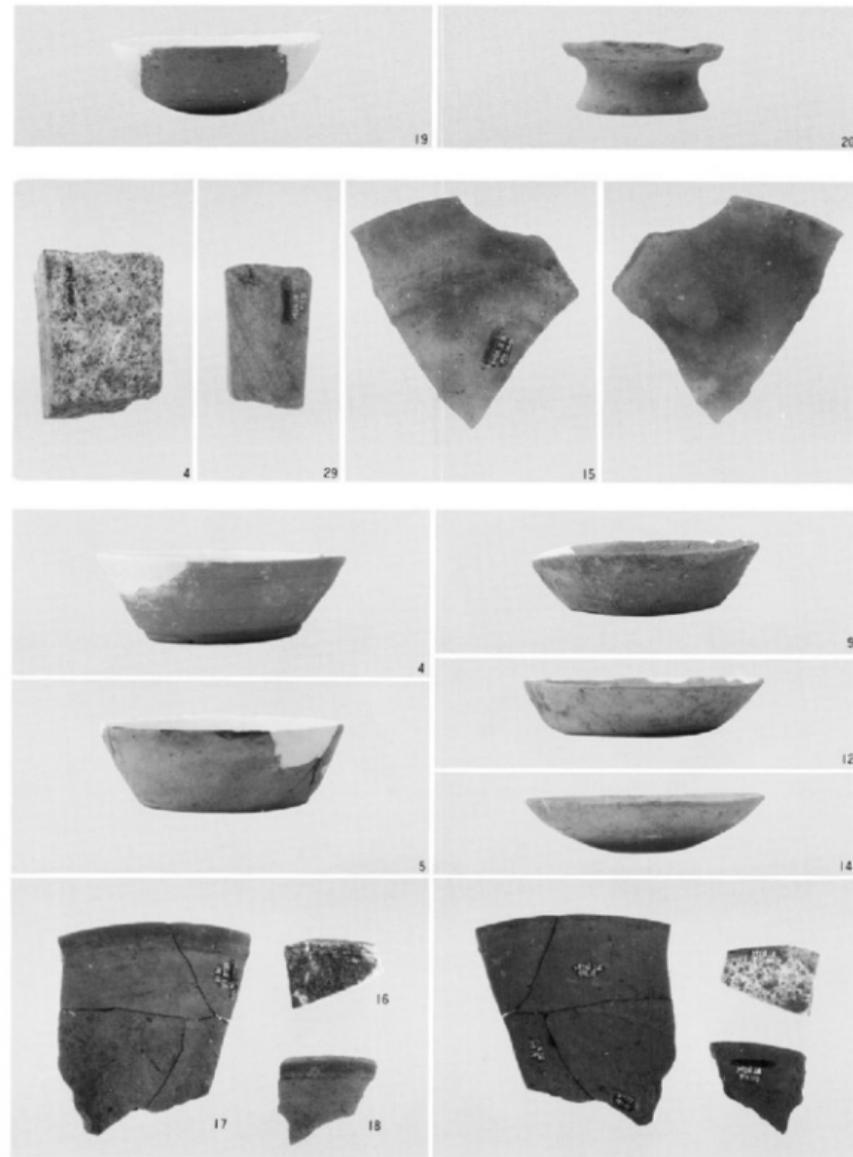
6. SK16土壤（南から）

图版 8



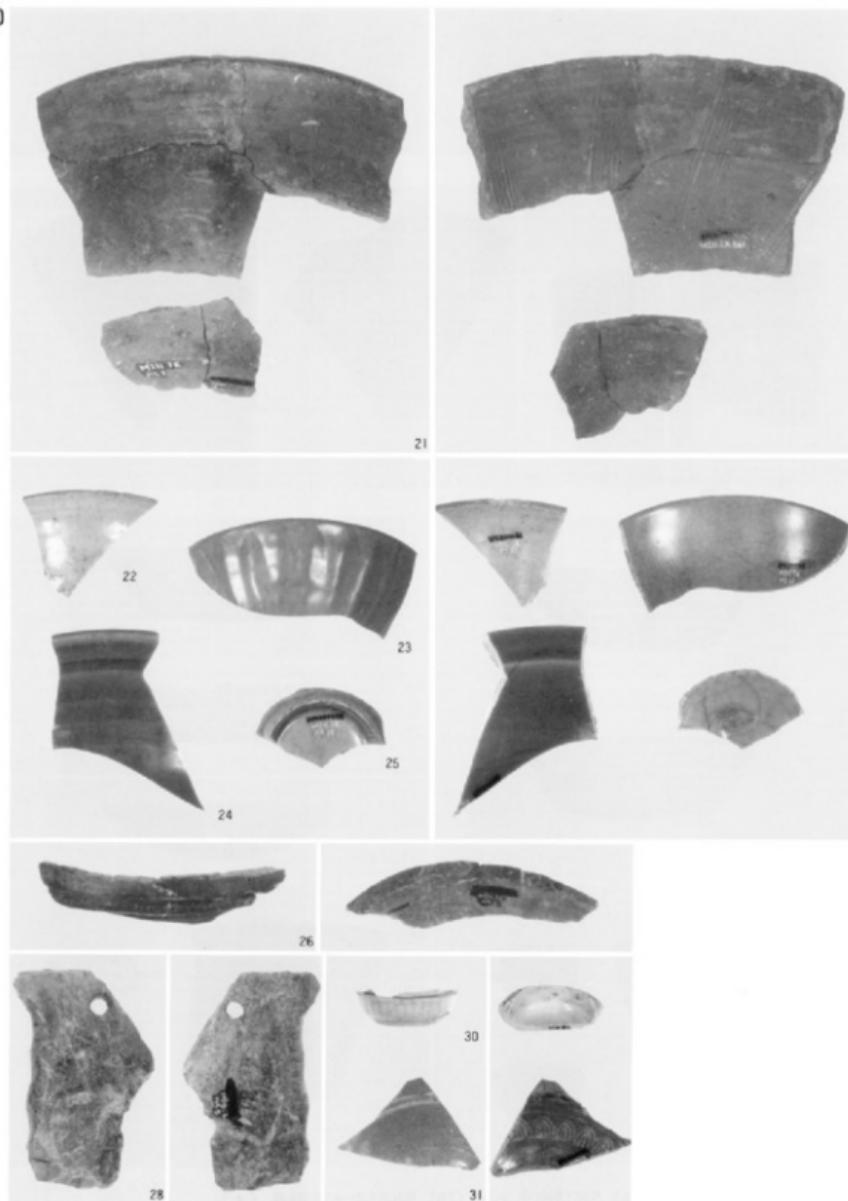
SK03出土土器・陶磁器 (1~3) SK04出土土器 (7)

SK06出土土器・陶磁器 (8~13) SK10出土土器・陶磁器 (14~18)



SK14出土土器 (19) SK16出土土器 (20) SK03出土石製品 (4)

SB20出土土器 (15) SB19出土土器 (4) Pit出土土器 (5・9・12・14・16～18)



Pit出土陶磁器（21～25）Pit出土石製品（26・28）表土出土陶磁器（30・31）

峯 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第197集

平成元年3月31日 発行

編集発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 (株)松古堂印刷

